

シッキム王国王子の日本旅行（1908年）と ブッダガヤ復興運動

講演者：小林亮介（九州大学大学院比較社会文化研究院准教授）
討論者：澤田次郎（拓殖大学政経学部教授）

司会進行・開会挨拶：海野典子（早稲田大学大学院アジア太平洋研究科講師）

閉会挨拶：柳澤明（早稲田大学文学学術院教授、早稲田大学中央ユーラシア歴史文化研究所所長）

【日時】 2024 年 1 月 20 日（土）

14：00～16：30

【プログラム】

14：00～14：10 開会挨拶（海野典子）

14：10～15：10 講演（小林亮介）

15：10～15：25 休憩

15：25～15：45 コメント（澤田次郎）

15：45～16：25 全体討論

16：25～16：30 閉会挨拶（柳澤明）

参加登録は
こちらから！



【会場】

早稲田大学早稲田キャンパス19号館3階309教室（対面式）

※ 1月17日（水）正午までに、下記URLまたは右上のQRコードから事前登録をお願いいたします。

<https://forms.gle/hu9Dvu3cGhWvXt9w7>

【登壇者の経歴など】

早稲田大学高等研究所HPをご覧ください。

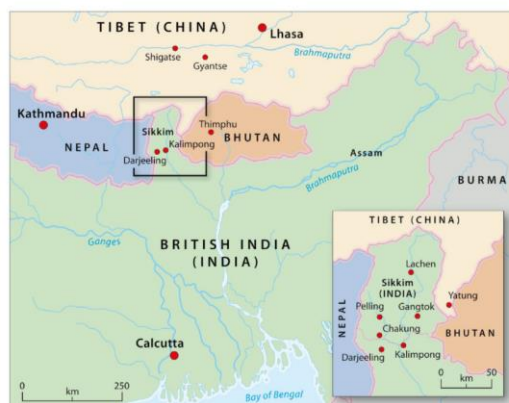
<https://www.waseda.jp/inst/wias/news/2023/11/17/14379/>

【共催】

早稲田大学中央ユーラシア歴史文化研究所

【講演趣旨】

チベットで独自の発展を遂げたチベット仏教は、16世紀～18世紀にヒマラヤ・チベットからモンゴル、満洲／中国東北、北京などに広まり、ユーラシア東部の歴史を動かす要因となったことが知られている。しかし、19世紀以降のチベットやチベット仏教徒たちの動向が、アジア史のなかでどのような役割を果たしたのかについては、明らかになっていない点が多い。こうした中で、近年次第に注目が集まっているのは、19世紀後半以降、チベット仏教僧たちが鉄道・定期航路など近代的交通網を利用して活動範囲を広げていったことである。既存のチベット仏教文化圏を超え、内陸と海域、さらにアジアとヨーロッパを架橋した彼らの動きは、いかなる知識・情報の環流や人的ネットワークの形成をもたらし、チベット仏教文化圏、そしてアジアの近代にどのような政治的・文化的インパクトを与えたのであろうか。こうした論点を意識しつつ、本講演では、1908年にヒマラヤのチベット仏教王国シッキムの王子スィーキョン・トゥルク・ナムギェルがおこなった世界旅行／日本旅行をとりあげ、この旅行の目的や意義を、当時、南アジアや日本の仏教徒たちのあいだで展開したブッダガヤ復興運動と関連づけて考えていきたい。



Markus Viebeck ed., *Transcultural Encounters in the Himalayan Borderlands: Kalimpong as a "Contact Zone"*, Heidelberg University, 2018, Figure 1. (p. 4)